

特集
里地
～原風景を守り育てる～

Special Features
Rural land
Protecting and Nurturing Natural Scenery

里地と人・都市をつなぐ 里地モデル
Rural land model linking rural land
with people and cities

文化景観を取り戻す！

三瓶山の草原再生から

高橋 泰子

TAKAHASHI Yasuko

NPO法人緑と水の連絡会議/理事長



1—はじめに

「原生自然」の対極にあるのが「二次的自然」。この聞きなれない言葉は人が手を加えて存在する自然のことをさす。弥生の時代から原生自然に鋤を入れ耕し、米を作り続けた瑞穂の国の日本の風景のほとんどがこの二次的自然といっても過言ではない。したがって日本の「ふるさとの原風景」を語る場合、多くは田園を、そして里地・里山の風景を挙げるだろう。加えて、私は「草原」と答える。延喜式(平安時代中期に編纂された律令の施行細則)の「牧」の記述にあるように、古にはどこにでもあったであろう草原。それは放牧など農民の生業により形成されてきた自然。本稿では、日本の中で最も失われてしまった二次的自然「草原」を挙げ、鳥根県大田市で草原再生に関わった経験より「ふるさとの原風景」について論じていきたい。

2—国立公園・三瓶山の草原の歴史

鳥根県大田市のほぼ中央に位置する標高1,126mの三瓶山は男三瓶をはじめ、6つの山からなるトイデ(釣鐘)型の火山である。ここでは江戸時代から和牛放牧が盛んで、往時には1,300haに1,000頭ともいわれる牛が放牧されていた。牛たちの旺盛な食欲は丈の長い草の繁殖を押しさえ、シバやネザサのような食べられることに抵抗力のある短草型の草の広がりを助けていた。一方で毒があるために牛が食べ残すレンゲツツジやオキナグサなどの草花や、ウスイロヒヨウモンモドキに代表される草原性の蝶などの三瓶山を特徴付ける動植物は、四季の緑に華を添えてきた。さらに「採草や野焼き」などの人為圧が加わり、その繰り返しの利用が、温帯モンスーン気候の中にあっても草地が森林に移行するのを防ぎ、日本の中でも類まれな景観を呈していた。また三瓶山は、その



写真1—昭和30年頃の三瓶山西の原

「一糸もまとわぬ裸体に例えられる女性的な山容」が美しいと昭和38年大山・隠岐国立公園に編入された。

しかし、高度経済成長期に入る昭和30年頃には、営林署が山腹の広範囲にスギやカラマツを植え、山が変容し始めていた。また観光のために整備した道路には牛たちが侵入するなど、放牧牛を巻き込んだトラブルが続出していた。

同じ時期に農業を取り巻く環境が変化し、農作業の機械化によって役牛が不要となり、和牛には肉用牛の役割を課せられるようになった。その結果、輸入飼料で肥育させる加工畜産の道を選択することとなり、晩成型の放牧牛は市場から敬遠されるようになった。次第に放牧農家の数が減り、同時に採草や野焼きも途絶え、草を資源と考え、利用する文化が衰退した。三瓶山の草原は日本の他の草原がたどったと同じくサステナブルユース(持続的利用)とマネージメント(管理)という維持の基本が崩れ、縮小・荒廃していった。

3—地域の財産草原との出会い

あなたは草原の風に吹かれたことがあるだろうか。私は、開発されて跡形もないかつての「ふるさとの草原」で吹かれた風の心地よさを、今でも忘れることができない。今の日本では何百メートルも視界をさえぎるものがない緑の空間を探すことは困難である。ましてや、その開けた空間で風のささやく声を聞くことは難しい。草原の中の広大な空のブルーとグリーンを果てしない広がりの中で風を感じる時、悠久なる日本人としての「心」が動く。かつて牛馬が放牧されていた「牧」の存在を知らずとも、誰にでも入り込めた「原っぱ」があったことを思い出す人は多いはずである。ススキ・ハギ・オミナエシ・キキョウなど万葉集に詠われ、盆花として祖先に手向けられてきた草原性の草花は、生活と密着したものであり、そこに存在する草花や虫すべてが草原の歴史を背負い生き続けているものである。その意味では「草原は文化的景観」という良い。

かつては水田面積より広く、大正時代には国土面積の約11%もあった草原が、生活とのかかわりを絶ってからというもの、今では約1%にまで減少してしまっている。現存する草原面積のほとんどが阿蘇・久住の草原で占められ、地域に点在している草原の現状は、その価値を伝える文化の消滅も手伝い深刻である。草原にしか生きられない動植物の中には、さらにそれを上回る危機的状況を呈しているものもある。その貴重な草原が大田・三瓶山に存在することに気づいた時、自分がかつて故郷、宮城の草原で感じた風を思い出した。そして、なくしてしまったものを取り戻すことの難しさを知りつつ、草原再生への「心」が動いた。

4—草原再生

平成8年5月「西の原」に牛たちの声がこだました。実に4半世紀ぶりに放牧が復活した。それは平成3年、牛肉輸入自由化が始まり、大打撃を受けた畜産農家から放牧再開の声が上がったことに端を発する。草原の草を自給飼料とし、手間もコストも下げようというのだ。また、国立公園の指定根拠「草原」の変容に危機を感じていた行政や研究者、そして私たち市民団体が三瓶の草原再生事業として協働した結果でもある。

この化石燃料のいらぬ歩く草刈機(牛たち)は人間が利用できない草を蛋白質に変え、肉という副産物を提供し、ススキや灌木に埋もれ、見る影もなかった原野の草を「舌刈り」してくれた。そして、かつての草原の輪郭をゆっくりと確実に蘇らせた。



写真2—カワラナデシコ

写真3—オミナエシ



写真4—キキョウ

「そういえば昔の三瓶山はこうだったな」とバスや車を止めて牛が動く姿を目で追う人たち、歩きやすくなった草原に足を踏み入れ散歩する人も増え出した。5月の草原には大田市の花、レンゲツツジが久しぶりに太陽の光を浴び、黄橙色の花びらを風になびかせている。傍らでは希少種となったオキナグサも、そのいわれである老人のあごひげの様な種を飛ばそうと企んでいる。そして、夏はピンクのカワラナデシコ、秋には高貴な紫のリンドウ、そして緑に映える白いウメバチソウなどが全盛期の草原の姿を垣間見せてくれるようになった。次第に三瓶山の「アイデンティティ」は草原であることを地元の人たちが思い出し始めた。

5—草原管理ボランティア

現在の三瓶山の草原域のほとんどが大田市の所有である。そのうち放牧を再開した西の原では昭和63年の山火事の反省から、平成元年に大田市が実施主体となって野焼きを復活させていた。年間70万人にも上る観光客が求めるものは開けた空間であり、野焼きで植生遷移が止まった美しいススキ草原の広がりでもあった。

草の循環が断ち切られた今の時代には、従来の農家による草原の管理統制システムが崩壊してしまった。



写真5—ボランティアが欠かせない三瓶山の野焼き



■写真6—ボランティアは出会いの場

人口流出・高齢化も手伝い、農家は草原を「負の遺産」として重荷と感じ、維持するための義務を果たさなくなりました。その間も土に帰りにくいスキの堆積物は

年々たまり、そして大火事を呼んだ。「風景は農業の賜物」、文化を継承しない時代にあってはむなしく響く言葉だ。

私たちは、草原は国民共有の財産・地域の宝と位置づけ、平成8年よりボランティアとして参加している。以来、イバラ刈りなど多様な草原管理も実践した。ボランティア参加者は草原の生物の多様性を支えていることに誇りを持ち、自分たちの働きにより草原の姿が蘇っていく姿に歓喜した。また同じ目的を持ち、汗を流す爽快感を味わうとともに、毎年の継続により都市住民であるボランティア同士の関係性が生まれ、草原再生による新たな「つながり」を実感した。

6—「モーモー輪地」牛にもボランティア

野焼きをするには森林に火が燃え広がらないよう、事前に人手で幅2～3mの防火帯と呼ばれる火道を切る必要がある。その費用が拠出できないとして大田市が野焼きを止めるとい出した。草原が回復している現場で、第2回全国草原シンポジウム・サミットを開催し、その重要性を全国に発信した直後の平成10年のことであった。しかし、ここで止めるわけには行かなかった。そこで知恵を出し合い、簡易電気牧柵を使うことを思いついた。野焼きを行う外周に沿って電気牧柵で幅10～30mを囲み、断続的に地元農家の牛を放牧、中の草を食べさせ防火帯の機能を持たせた。資材は草原維持を心から願う都市住民であるボランティアが提供した。

「モーモー輪地」と名づけられた防火帯は全国草原ネットワークのつながりに乗り、九州の阿蘇や山口県秋吉台などに積極的に導入され、日本の大草原の危機を救



■図1—旧来の防火帯作り



■写真7—牛の舌刈りでできた防火帯

っている。こうして、人間ばかりでなく牛にもボランティアをお願いし、放牧を基に野焼きを継続させた。どうやら、地域で現存する半自然植生を生かし、その地域特有の景観を次世代に残すためには、志を同じくする農家と都市住民が、共に知恵を出し合う時代になってきたようだ。

7—草原での循環を地域循環に

「アー、牛のウンコだ。汚い、踏むな、踏むな」。子どもたちに三瓶の草原の循環の話をするには牛のウンコは格好の教材だ。逃げ腰の子どもたちに糞をひっくり返して説明する。よく見ると糞には大小色々な大きさのトンネルがくねりながら貫通していることが分かる。地面には牛の糞を寝床とし餌ともする、いわゆる「フンコロガシ」が住処を荒らされ、逃げ惑っている。糞が食べられたり、分解されてまた草になる、草原の中で起きる循環を話す。なかでも、三瓶山東の原にしかない牛と共存するわが国最大の糞虫「ダイコクコガネ」の話になると子どもたちの目は爛々と光る。

また、草原の大きな構成要素であるシバは牛に食べられ、種の周りの蠟状物質が胃液で溶かされ、発芽し易くなることも教える。すると子どもたちは、牛が広い草原で種まきと草刈を同時にしていたことを理解し、心の中でただ汚いだけと思っていた牛のウンコを草原の宝物と感じてくれる。一方、牛に選択的に食べ残された草花の色は単一化されがちな緑を引き立たせる。短草型のシバが繁殖しやすい環境は光を遮るものがなく、そこはイバラのようにとげのある植物にとっても天国となる。この厄介者のイバラ、実はウンコ同様に草原での多様性を育む要素のひとつである。牛が近づかないイバラの株の根元には、避難してきた草種が隠れている。時間軸・空間軸を変化させ、草原に次々とパッチ状に存在するイバラの株は、沢山の種を次の世代に伝えるものでもある。した



■写真8—草原を彩る花と蝶



■写真9—牛糞上のダイコクコガネ



■写真10—親子でスキ草原でかくれんぼ

がってイバラのような邪魔に見えるものも皆伐すべきではないのだ。そこには何か、人間界に通じるものがあるようにも思える。草原が

森林化を免れ、草原であり続けるためには、人間の営みとの絶妙なバランスが必要であることが分かる。このような草原の多様性を楽しく体験しながら理解してもらおうと「草原観察会」や親子で「スキ草原でかくれんぼ」「イバラ刈り」などを企画している。こうした三瓶の草原でのさまざまな出会いと感動は、家庭で子どもたちから親へ、祖父母へ、そして地域に伝わり、草原維持への理解が広がる。

8—里地からのエネルギーを福祉と環境に

長い活動を通して出会った人々の中には、山間過疎地である里山を守りきれなかった人々や山の中でひっそりとそして不安の中で暮らす高齢者が多いことに気づく。これからは里山を守るだけではなく、この人々が安心して暮らせる環境をつくり、街づくりを目指さなければならないと思った。平成15年、福祉と環境のコラボレーション、グループホーム七色館の建設と同時に、その暖房・給湯システムに里山のエネルギーを使おうとバイオマスチップボイラーを導入した。それは荒れる里山を憂い、地元の里山からの恵みを七色館で使い、燃焼灰をまた里山に戻すという地域循環モデルを構築する目的もあった。草原に価値を見出したように新たに里山に経済価値を見出し、里地からのエネルギーを福祉と環境に生かす社会システムに変えていく必要がある。

尊敬する元日本自然保護協会会長の故沼田眞先生には、『景観とは、人間の影響や歴史を含む地圏や生物圏の構造や動態の全てである。地域特有の景観とは、目の前に広がる視覚対象としての植生や動物相、自然の風景、地形ばかりではなく、そこに住んでいる個々人の「五感」と「心の世界」を加えた「生き様」、そして地域の歴史や文化が育んだ結果であり、住んでいる人たちの集団としての意思による働きかけで変化する繊細さを併せ持つ』と教えていただいた。私は先生から、この今の時



■写真11—イバラ刈りのあと、ホームの人々と交流

代を先導するファシリテーターの役目を仰せつかっているような気がしている。

<写真提供>
写真1：さんべまつばら写真館



■図2—地域循環のモデルケース!